

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2015～2017

課題番号：15KT0090

研究課題名(和文)高齢者の孤立・孤独と社会的認知の変容およびその心理的制御に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the isolation and loneliness of the elderly: Transformation of social cognition and psychological control

研究代表者

佐藤 眞一 (SATO, SHINICHI)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：40196241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：社会的孤立を自由を求める自我隔離によって社会的サポートが欠如した状態、心理的孤独感を他者希求欲求があるにもかかわらず他者排斥と逃避によって生じる自己喪失感情と定義して、孤立や孤独に陥った人々の社会的認知の変容と社会関係の問題点を明らかにした。ただし、高齢者の状態には多様性があるため、健常高齢者、認知症高齢者、高齢視覚障がい者、高齢がん患者を対象に上記の問題点を検討した。一方で、孤立や孤独に陥る危機的状况にあったとしても、その状態を制御し、社会生活に適応してウェルビーイングの高い生活を実現している高齢者もいる。この点に関して、知恵と英知の発達と孤高の境地の状態に関する研究の基盤作りを行った。

研究成果の概要(英文)：We define social isolation as a state of lack of social support by seeking ego isolation for freedom. And we also define psychological loneliness as the self-loss feeling caused by the exclusion of and the escape from others in spite of seeking others. On those basis, we have clarified the transformation of social cognition and the problems of social relations among the elderly who fell into isolation or loneliness. However, because there is a variety in the state of the elderly, we examined the above problems for healthy elderly people, the elderly with dementia, the visually impaired elderly, and elderly cancer patients. On the other hand, even if it is in a crisis situation that leads to isolation or loneliness, there are the elderly who control their condition and adapt to social situation and realize a high well-being life. In this regard, we made a foundation for research on the development of wisdom and the state of preference for solitude.

研究分野：社会科学

キーワード：高齢者 孤立・孤独 認知症 視覚障がい がん患者 社会的認知 知恵・英知・孤高 ポジティブ情動活性化

1. 研究開始当初の背景

社会の超高齢化に伴い未婚、離別、死別等の結果、社会的に孤立する高齢者、他者との関係性の問題から深い孤独感から逃れられない高齢者が存在する。しかしながら、一般に高齢者は若年者に比べると、幸福感が高く、社交性にも優れていることがわかっている。エイジング・パラドクスと呼ばれるこうした事実は、社会的孤立の改善や心理的孤独感を制御する機能が高齢者に存在することを予想させる。これまでの我々の研究では、社会的孤立および心理的孤独感によって生じる反社会的傾向や対人恐怖等の社会的認知の歪みに対して、社会情動的選択制理論に基づくポジティブティ効果および老年的超越理論による対処の検討を行ってきたが、本研究課題では、一人でいることを好む傾向としての独自志向性の特性を、健康高齢者、認知症高齢者、高齢視覚障がい者、および高齢がん患者の孤立・孤独への制御機構としての効果を検討することを主な課題とする。

2. 研究の目的

(1) 健常高齢者については、孤立・孤独およびその制御方略としてのエイジング・パラドクスを検討すること、そして、一人でいることを好む傾向(Preference for Solitude)の高さが独自志向性と相関することが明らかになったため、孤立に向かう可能性と孤高の境地に至る可能性の分岐点を探るための研究を開始することとした。この尺度は、孤独死予備軍を把握することにもつながる研究と考えている。また、孤立・孤独のネガティブな側面の研究と並行して、ライフイベント経験によって蓄積されるポジティブな側面である知恵・英知に関する機能と構造の検討を行う。知恵と英知に関する研究が孤高の境地といかなる関係にあるかを探る研究につながることを目標としている。

(2) 認知症高齢者については、米国精神医学会が2013年に改訂したDSM-5において6種の診断基準が示されたが、新しく加わった社会的認知に関する尺度開発が遅れていることから、新たな課題の作成を行う。また、ポジティブ情動を活性化することが、認知症高齢者のウェルビーイングを高めるとの仮説から、笑いの効果を検討する基礎的実験研究および実践的介入プログラムの作成を行う。

(3) 高齢者視覚障がい者については、外界からの情報の80%程度が遮断されるといわれているため、盲老人養護施設での面接調査によって、その孤独感制御が以下に行われているかを探ることを目的とする。

(4) 高齢がん患者については、質問紙調査によって、家族とのコミュニケーションとウェルビーイングとの関係について検討するとともに、事例の収集を行う。

3. 研究の方法

(1) 健常高齢者: 青年期(30代)、中年期(50代)、

高齢期群(70代)の各群の男女250名を対象にインターネット調査を実施した。調査項目は主観的ウェルビーイング(協調的幸福感尺度・LSIK・感情的ウェルビーイング尺度)、孤独感(UCLA 孤独感尺度)、独自志向性(Preference for Solitude Scale・対人関係への志向性尺度)、社会接触頻度であった。

また、知恵・英知の機能と構造を検討する研究においては、多様な領域に係る概念であるため、まず、文献研究から開始し、高齢者を対象とする面接調査を経て、測定内容の分類によって尺度構成を行い、インターネット調査を行った。

(2) 認知症高齢者: 日常会話の減少に伴う孤独感の増大が予想されたため、年間を通して事例検討を行うとともに、前年度に作成した日常会話式認知機能評価(CANDy)の会話マニュアルを用いたグループホームでの会話促進実践研究を行った。これらの研究を踏まえて、CANDyによる言語的コミュニケーションの検討を発展させて、社会的認知に関連した非言語的コミュニケーションを検討するために表情認知課題、心の理論課題、非言語的コミュニケーション評定尺度を作成し、事例を収集した。今後は、各課題と尺度の標準化に向けての研究が必要と考えられる。さらに、認知症高齢者のウェルビーイング促進のために笑いの効果を検討する基礎的実験を経て、ポジティブ情動活性化の実践的介入に向けて、施設で一般的によく行われているラジオ体操に感情の顔面フィードバック仮説と情動伝染を応用した「笑うラジオ体操」をオリジナルに作成して介入研究を実施した。

(3) 高齢視覚障がい者: 盲養護老人福祉施設の入居者19名のインタビューデータの分析を行った。面接では入居前・入居直後・現在に至るまでを時系列順に振り返ってもらい、印象に残った出来事について尋ねた。

(4) 高齢がん患者: 質問紙調査によって、家族とのコミュニケーションとウェルビーイングとの関係について検討するとともに、事例の収集を行った。

4. 研究成果

(1) 一般高齢者: インターネット調査によって得られたデータから、使用する尺度の信頼性と妥当性、およびインターネット調査におけるサンプルバイアスを確認するために性格特性との関連を検討した。その結果、調査対象となった高齢期群は、他の若い世代群よりも開放性や誠実性が高いことが分かった。

また、一人でいることを好む傾向(Preference for Solitude; PS)の高さが独自志向性と相関することから、英語原版から日本版尺度を構成し、学会発表を行った。その後、我が国の状況を踏まえた独自の尺度を作成し、孤立に向かう可能性と孤高の境地に至る可能性の分岐点を探るための研究を開始した。この尺度は、孤独死予備軍を把握することにもつながる研究と考えている。

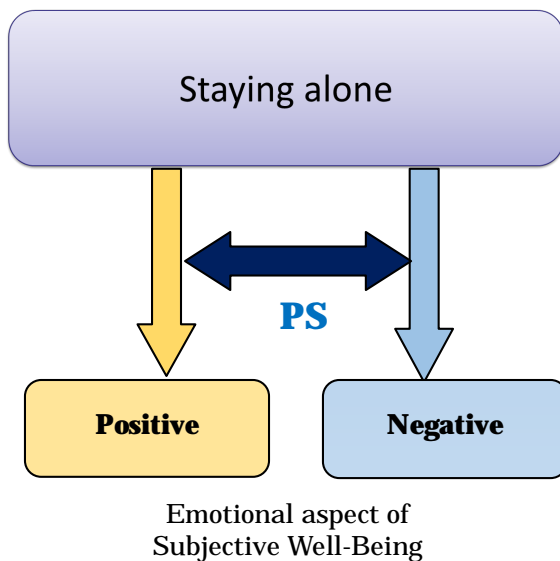


Figure. 1
The relationship between PS and SWB

知恵・英知に関する研究は、知的側面のみならず感情や意志の側面を包括し、かつその構造と機能を心理学的な実験や調査によって実証化する取り組みである。文献研究を実施して、様々な学術分野の知恵・英知の概念を整理し、併せて高齢世代6名の男女を対象に知恵の定義に関する半構造化面接を行った。発言内容から「知恵の構成要素」について語られている箇所を抜き出し、カテゴリー分類を行った。その結果、知恵・英知の構成要素として、「知性」「推論能力」「実用性」「柔軟性」「経験」「規範に基づいた態度」「直観性」「思慮深さ」「情報に対する開放性」「内省的態度」「共感性」の11カテゴリーが抽出された。なかでも「規範に基づいた態度」は、一般常識や道徳観といった、社会的規範に基づいた態度を意味している。6名中4名の対象者が、知恵・英知がある状態として、一般常識や道徳観に言及していた。得られたカテゴリーに基づいて、知恵・英知の機能と構造に関する尺度構成を行い、社会的望ましさ尺度等とともにインターネット調査を行った。詳細分析は今後の課題である。

(2)認知症高齢者：CANDYは、従来、国際的にも例を見ない認知機能検査を実施しないで認知症をスクリーニングする方法である。日常会話を分析するのはそこに神経科学的認知機能ばかりでなく、社会的認知機能も反映されると考えているからである。従来のMMSEのような神経科学的認知機能検査では捉えられなかった認知症高齢者のQOLをも捉えられることが明らかになっているので、認知症高齢者の孤立・孤独を解明する手段としても有効と考えている。また、社会的認知機能測定法の開発については、心の理論を背景にしてこれまでのオリジナルの測定法を種々吟味し、測定法の確定に向けて個別面接による測定を行った。現時点では、予備的な検討にとどまっているが、今後は、認知症重症度な

どを明確にしながらデータを積み重ねていく予定である。ポジティブ感情活性化研究は、戦略的な「笑い」の実践が認知症高齢者のポジティブ感情を活性化し、BPSD（行動・心理症状）を改善し、QOL向上に資するかを検討する目的で健常高齢者と若年者を対象に「笑い」の効果に関する実験的研究を行った。



質問内容

「この絵は、どのような場面だと思いますか？ できるだけ詳しく話してください。」

Figure.2
社会的認知課題の一例

(3)高齢視覚障がい者：19名に対する面接調査から現在の状態について対象者をグループとしてまとめた結果、「活動的適応群」、「非活動的適応群」、「依存群」、「孤立群」の4つに分類された。施設生活に適應していると考えられる「活動的適応群」の利用者は、一人の時間に価値を見出していた。施設生活への適應に関する要因として、自分の落ちつける空間を確保し、社会的活動範囲の拡大に繋げることが挙げられた。

(4)高齢がん患者：孤独感対処についての質問紙調査の結果、終末期における家族とのコミュニケーションが本人の精神的安寧と家族の看取り後の精神的安定にポジティブな効果のあることが明らかになった。また、在宅療養がん患者にとって、家族の存在は孤立・孤独の制御に強く関連している。そこで家族に対する心理的支援の効果を調べるために、「在宅療養後に病院で死亡した前立腺がん、多発骨転移の88歳男性の症例」と「胃がんのために在宅で死亡した妻と二人暮らしの42歳男性の症例」を比較検討し、心理的支援の経過を考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計11件)

Oba, H., Sato, S., Kazui, H., Nitta, Y., Nashitani, T., and Kamiyama, A. Conversational assessment of cognitive dysfunction among residents living in long-term care facilities. International

Psychogeriatrics, 30, 査読有, 2018, 87-94.
DOI: 10.1017/S1041610217001740

Toyoshima, A., Martin, P., Sato, S., and Poon, L., The Relationship between vision impairment and well-being among centenarians: Findings from the Georgia Centenarian Study. *International Journal of Geriatric Psychiatry*, 33, 査読有, 2018, 414-422. DOI: 10.1002/gps.4763

Nakazato, K., Shiozaki, M., Hirai, K., Morita, M., Tataru, R., Ichihara, K., Sato, S., Simizu, M., Tuneto, S., Shima, Y., and Miyasita, M., Verbal communication of families with cancer patients at end of life: A questionnaire survey with bereaved family members. *Psycho-Oncology*, 27, 査読有, 2018, 155-162.

DOI: 10.1002/pon.4482

大庭輝・佐藤眞一・数井裕光・新田慈子・梨谷竜也・神山晃男, 日常会話式認知機能評価 (Conversational Assessment of Neurocognitive Dysfunction; CANDy) の開発と信頼性・妥当性の検討, *老年精神医学雑誌*, 28, 査読有, 2017, 379-388.

Toyoshima, A. and Sato, S., Examination of the relationship between preference for solitude and emotional well-being after controlling for the effect of loneliness. *Osaka Human Sciences*, 3, 査読有, 2017, 171-183.

春日彩花・佐藤眞一・高橋正美, 心理学的知恵研究の展望と発達の検討 「知恵のある」状態の連続性と非連続性, *生老病死の行動科学*, 21, 査読有, 2017, 15-31.

久保田彩・佐藤眞一, 高齢者介護施設職員の看取りケア効力感の測定とその関連要因, *心理学研究*, 87, 査読有, 2016, 485-494.

豊島彩・田淵恵・佐藤眞一, 若者における高齢者虐待の認識度と高齢者への態度との関連 虐待の背景に着目して, *老年社会科学*, 38, 査読有, 2016, 308-318.

佐藤眞一, ハッピー・エイジングに向けた高齢期の心のあり方, *FJC (福祉住環境コーディネーター協会)*, 42, 査読無, 2016, 8-9.

佐藤眞一, 高齢者心理学の歴史と展開, *Aging & Health*, 25(3), 査読無, 2016, 12-15.

佐藤眞一, ソーシャル・キャピタル 可視化される「絆」, *福祉介護テクノプラス*, 9(6), 査読無, 2016, 1-5.

[学会発表] (計 30 件)

大庭輝・鈴木則夫・桑山信子・佐藤眞一, 認知症を理解する: 認知症でも共存できる地域のために, 第 5 回福祉住環境サミット, 2018, 大阪大学豊中キャンパス (豊中市).

豊島彩・佐藤眞一, 成年期以降の孤独感の年代差と関連要因の検討, 日本心理学会第 81 回大会, 2017, 久留米シティプラザ (久留米市).

Toyoshima, A. and Sato, S., Age differences in the effects of preference for solitude on emotional well-being. The 21th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics, 2017, San Francisco, (USA).

中里和弘・島田千穂・舞鶴史絵・水雲 京・佐藤眞一, 在宅における看取りケアの意思反映が家族の適応に及ぼす影響, 第 59 回日本老年社会学会大会, 2017, 名古屋国際会議場 (名古屋市).

春日彩花・佐藤眞一・榎藤恭之・Masami Takahashi, 日本人の「知恵」の構成要素の検討 高齢世代を対象としたインタビューから, 第 59 回日本老年社会学会大会, 2017, 名古屋国際会議場 (名古屋市).

豊島彩・佐藤眞一, 社会関係への志向性と高齢期の主観的ウェルビーイングとの関連 中年期との比較による検証, 第 59 回日本老年社会学会大会, 2017, 名古屋国際会議場 (名古屋市).

大庭輝・南川美月・山川みやえ・佐藤眞一, 介護職員の職務における葛藤とその対処は仕事の動機づけにどのように影響するのか? 第 18 回日本認知症ケア学会大会, 2017, 沖縄コンベンションセンター (沖縄市).

島内晶・佐藤眞一・西村昭徳, メタ記憶の自己認識類型と精神的健康度との関連 記憶の自信と衰えの自覚における年齢差からの検討, 日本発達心理学会第 28 回大会, 2017, 広島国際会議場 (広島市).

新田慈子・佐藤眞一, 日常会話能力を維持する高齢者の社会的認知機能評価法の検討, 第 11 回日本応用老年学会大会, 2016, 大阪大学豊中キャンパス (豊中市).

大庭輝・佐藤眞一・数井裕光・新田慈子・梨谷竜也・神山晃男, 日常会話形式による認知症スクリーニング法の開発: 認知症に見られる日常会話の特徴に関する検討, 第 11 回日本応用老年学会大会, 2016, 大阪大学豊中キャンパス (豊中市).

Oba, H. and Sato, S., Effects of staff training on confidence levels: A comparison between seminar training and case conference training. The 31th International Congress of Psychology, 2016, Yokohama (Japan).

Nakano, M., Sato, S., and Shiino, A., The therapeutic nursing interview for the purpose of early diagnosis and care of Alzheimer ' s disease in outpatient department :Part . Alzheimer ' s Association International Conference, 2016, Toronto (Canada).

豊島彩・佐藤眞一, 施設入居に伴う社会関係の変化への対処方略 高齢の視覚障がい者を対象として, 第 58 回日本老年社会学会大会, 2016, 松山大学 (松山市).

桑村海光・西尾修一・佐藤眞一, 認知症高齢者を対象としたロボットによる対話支援,

第 30 回人工知能学会全国大会, 2016, 北九州国際会議場(北九州市)

佐藤眞一, 後半生を豊に生きる「心」の保ち方～大衆長寿社会と社会参加～, 第3回福祉住環境サミット, 2016, 明治学院大学白金キャンパス(東京都).

金沢善智・松尾清美・吉永美佐子・運上昌洋・佐藤眞一・江草典政・鴛田一夫・川瀬健介・岡本多喜子, 個人を守る住環境から、コミュニティと共存できる住環境へ, 第3回福祉住環境サミット, 2016, 明治学院大学白金キャンパス(東京都).

Kubota, S. and Sato, S., Perceived efficacy in end-of-life care provision among Japanese long-term care staff. The 68th Gerontological Society of America Annual Scientific Meeting, 2015, Orlando (USA).

Toyoshima, A., Lee, K., Martin, P., Sato, S., and Poon, L., The influence of personality on retirement evaluation, social resources, and loneliness in later life. The 68th Gerontological Society of America Annual Scientific Meeting, 2015, Orlando (USA).

Toyoshima, A., Martin, P., Sato, S., and Poon, L., The influence of vision function and social support on well-being among oldest-old adults: Findings from the Georgia Centenarian Study. The 68th Gerontological Society of America Annual Scientific Meeting, 2015, Orlando (USA).

豊島彩・佐藤眞一, 高齢者研究:生涯発達心理学への回帰, 日本心理学会第79回大会, 2015, 名古屋国際会議場(名古屋市).

〔図書〕(計9件)

中里和弘・舞鶴史絵・鈴木真智子・佐藤眞一, 在宅がん患者と家族に対する心理支援とその意義, 福尾恵介編『在宅がん患者の栄養サポートに精通した在宅医療福祉従事者の全国的育成システムの開発 症例テキスト』, 厚生労働科学研究費補助金がん対策推進総合研究事業, 2018, 29-39.

Kuwamura, K., Nishio, S., and Sato, S., Can we talk through a robot as if face-to-face? Long-term fieldwork using teleoperated robot for seniors with Alzheimer's disease. In Nishio, S., Nakanishi, H., and Fujinami, T. (eds.), Investigating Human Nature and Communication through Robots, Lausanne: Frontiers Media, 2017, 62-74.
DOI: 10.3389/978-2-88945-086-2

柏木 宏・佐藤宏一・佐藤眞一・陳 礼美・藤田綾子・古矢弘道・堀 薫夫・三田保則・和田征士, 自分の学習(楽しみ)と社会貢献をつなげるカリキュラム, NPO 法人大阪府高齢者大学校編『高齢者が動けば社会が変わる NPO 法人大阪府高齢者大学校の挑戦』, ミネ

ルヴァ書房, 2017, 231-250.

柏木 宏・佐藤宏一・佐藤眞一・陳 礼美・藤田綾子・古矢弘道・堀 薫夫・三田保則・和田征士, 超高齢社会への NPO 法人大阪府高齢者大学校の挑戦, NPO 法人大阪府高齢者大学校編『高齢者が動けば社会が変わる NPO 法人大阪府高齢者大学校の挑戦』, ミネルヴァ書房, 2017, 214-230.

佐藤眞一, 高齢期の危機は心構えで乗り越える ライフイベントの対処法, NPO 法人大阪府高齢者大学校編『高齢者が動けば社会が変わる NPO 法人大阪府高齢者大学校の挑戦』, ミネルヴァ書房, 2017, 97-119.

佐藤眞一(吳佩俞 訳), 『老後生活心事典』, 中華人民共和国:上海社会科学院出版社, 2017, 総 264 頁.

佐藤眞一, 条件付け・他 11 項目, 一般社団法人認知症ケア学会認知症ケア用語辞典編纂委員会編, 『認知症ケア用語辞典』, ワールドプランニング, 2016, 総 410 頁.

佐藤眞一・権藤恭之, 『よくわかる高齢者心理学』, ミネルヴァ書房, 2016, 総 204 頁.

佐藤眞一(吳佩俞 訳), 『老後生活心事典』, 台湾:晨星, 2016, 総 272 頁.

〔その他〕

ホームページ等

<http://cocolomi.net/candy/>

<http://cocolomi.net/candy/en/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 眞一 (SATO, Shinichi)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号: 4 0 1 9 6 2 4 1